

LUIZA KLOYAN, Ph.D.  
*Nagoya University, Graduate School of  
Languages and Culture,  
Department of Japanese Language and Culture  
E-mail: luizakloyan39@gmail.com  
DOI: 10.56925/2953-7894-2022.5-108*

## アルメニア語と日本語の名詞修飾表現の対照に見られる語用論的な要因

**キーワード:** 語用論、日本語、アルメニア語、名詞修飾、対照比較、関係節、内の関係、外の関係

### 1 はじめに

日本語の名詞修飾節には、(1 a, b) のように「主要部名詞」と「修飾節」の間に厳密な論理関係がなくても何らかの語用論的推論を媒介として成立する表現が存在する（堀江・パルデシ 2009 : 52<sup>1)</sup>）。

(1) a. [ 頭がよくなる ] 本

b. [ トイレに行けない ] コマーシャル

---

<sup>1)</sup> 堀江薫、プラシャント・パルデシ『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』研究社, 2009 (Horie Kaoru, *Prashant Pardeshi Typology of Language: An Approach to Cognitive Typology*, Kenkyusha, 2009).

Comrie (1996, 2002)<sup>2</sup> は、世界の様々な言語の「関係節」をヨーロッパ型とアジア型とに分類しており、前者は主要部名詞と修飾節の関係が統語的に規定されるタイプであり、英語がその典型例として挙げられている。後者は両者の関係が語用論的要因によって規定されるタイプであり、日本語はその典型例とされている。アジア型と分類されている言語には、他に、韓国語、中国語、アイヌ語、ドラヴィダ諸語、トルコ語を除くトルコ系言語などが挙げられている。

アルメニア語は、インド・ヨーロッパ語族の言語であるため、一見するとヨーロッパ型言語のように振る舞っているように見えるが、場合によってはアジア型言語的な特徴がヨーロッパ型言語的な特徴よりも顕著な場合もある。そういった事例の一つに、アルメニア語の名詞修飾表現が挙げられる。アルメニア語の名詞修飾表現には主要部後置型の定形節と主要部前置型の非定形表現が存在しており、前者はヨーロッパ型言語のように振る舞うが、後者は日本語の連体形述語による名詞修飾節のように、語用論的推論がその成立に密接に関わっている。例えば、(2 a) の日本語では、被修飾名詞「お金」と修飾節「通訳し

---

<sup>2</sup> Comrie B., *The Unity of Noun-Modifying Clauses in Asian Languages*. *Pan-Asiatic Linguistics*, Proceedings of the Fourth International Symposium on Languages and Linguistics, Salaya, Thailand: Mahidol University at Salaya, 1996, pp. 1077-1088; Comrie B., *Typology and Language Acquisition: The Case of Relative Clauses*, ed. Anna Giacalone Ramat, *Typology and Second Language Acquisition*, Berlin: Mouton de Gruyter, 2002, pp. 19-37.

た」の間には直接的な格関係は成立しないが、「通訳したことによって報酬を得る」という語用論的な推論（因果関係の推論）によって両者が結び付けられている。(2 a) を英語のような言語に直訳した (2 b) は容認されず、(2 c) のように因果関係の推論を明示的に言語化する必要がある。

(2) a. [ 日本語を教えた ] お金

b. \*the money [which I thought Japanese]

c. the money [which I earned *by teaching Japanese*]

しかし、(2 a) をアルメニア語に訳した場合、(3) のように非定形動詞による名詞修飾表現として問題なく成立し、日本語と同様な解釈が得られる。

(3) [tʰargman-ac-s] gumar-ě

通訳する-結果分詞-1人称単数 金-定

「通訳したお金」

ただし、アルメニア語でいつもこのような名詞修飾表現が成立するわけではない。例えば、(1a, b) のような非定形動詞による名詞修飾表現は成立しない (4 b)。このことから、アルメニア語の名詞修飾表現には一定の制約が課せられていることが分かる。

(4) b. \*[imastnan-al-u] girkʰ

賢くなる-不定詞-属格 本

「頭がよくなる本」

本研究の目的は、日本語との対比を通じてアルメニア語の

非定形名詞修飾表現の成立条件およびその成立に関わる制約を明らかにすることにある。

## 2 先行研究

日本語学の分野では連体形述語による名詞修飾節を一般的に「連体修飾節」と呼んでいる(寺村 1992など<sup>3</sup>)。本稿においては統一的に「名詞修飾表現」と呼ぶことにする。寺村(1992)は日本語の連体形述語による名詞修飾表現を「内の関係」、「外の関係」、「短絡型」の三つに分類している。この中、「内の関係」の名詞修飾表現は (4) のように主名詞と修飾節の間に様々な格関係が成立し、英語などのヨーロッパ型言語における関係節に相当する。

(4) [ サンマを焼く ] 男 ( 男がサンマを焼く )

これに対して、「外の関係」の名詞修飾表現では主名詞と修飾節の間にそのような格関係が成立しない (5) (6) 。日本語のこのような表現は英語などの「名詞を主要部とする補文」(5)、または「非定形の名詞修飾句」(6) に相当する(堀江・パルデシ 2009)。

(5) a. [ 北島は試合に勝った ] ( という ) ニュース

b. the news [that Kitajima won the race]

---

<sup>3</sup>寺村秀夫「連体修飾節のシンタクスと意味」『寺村秀夫論文集-日本語文法編-』くろしお出版, 1992, 157-320 (Teramura Hideo, *Syntax and Meaning of Adnominal Modifying Clauses*, Teramura Hideo Papers: Japanese Grammar, 1992, pp. 157-320).

- (6) a. [ サンマを焼く ] におい  
 b. \*the smell [that one was grilling fish]  
 c. the smell of fish grilling (lit. the smell of (one) grilling fish)  
 (堀江・ パルデシ 2009 : 51)

また、寺村 (1992) は (7) のような「短絡型」的な名詞修飾表現を、「内の関係」と「外の関係」の連体修飾節の中間的なタイプとして位置付けている。そして、これらの表現が文中における様々な要素が縮約された結果生じた表現と説明している。

(7) [ トイレに行けない ] コマーシャル

日本語のこれらの「外の関係」および「短絡型」的な名詞修飾表現の成立には、語用論的な要因が大きく関わっている。つまり、英語などの言語と違って「主要部名詞」と「修飾節」の間に厳密な論理関係がなくても、語用論的な推論によって成立するということである (堀江・ パルデシ 2009 : 52)。日本語の名詞修飾表現の語用論的な解釈について従来いくつかの提案が行われてきた。以下、白川 (1986)<sup>4</sup>、加藤 (2003)<sup>5</sup>、Matsumoto

---

<sup>4</sup>白川博之「連体修飾節の状況提示機能」『言語学論叢』(筑波大学) 5, 1986, 1-16 (Shirakawa, Hiroyuki, *Noun-modifying Clauses for Circumstance Presentation*, Journal of General Linguistics, University of Tsukuba, 5, 1986, pp. 1-16).

<sup>5</sup>加藤重広『日本語修飾構造の語用論的研究』, 2003, ひつじ書房 (Kato, Shigehiro, *A Pragmatic Study of Japanese Modification Structures*, 2003).

(1997)<sup>6</sup> を概観する。

白川 (1986) は、(8) のような例文を日本語母語話者が無理なく理解しているにも関わらず、日本語の「どんな文法書を見ても、恐らく下線部に見られるような修飾節と被修飾部との結び付きを許すような規則が載っていないだろう」と指摘し、日本語を母語でない人にとって理解しづらい構造であると述べている (白川1986:1)。

(8) 昭和三十六年の秋、文芸春秋社の講演旅行で山陰へ行った、[ 米子へ泊まった ] 朝、私は早く起きて車を雇い、父の故郷へ向かった。(白川 1986:1; 表記を一部補足、以下も同様)

そして、日本語のこのような連体形述語による名詞修飾構造を解釈するために語用論的な意味解釈のメカニズムが必要であると指摘している。例えば、(8) のような文を解釈する際に、「ものを売る行為」の引き換えとして「金を受け取る」という意味論的知識があることによって、「本を売った」というコトから「金を手に入れる」という状況を推論できると説明している (白川1986 : 8 ; 表記を一部補足)。

(8) [ 本を売った ] 金でビニール製のボストンバッグと赤い皮の靴を買った。

しかし、(9 a) が成立し、(9 b) が成立しないのは、(9 a) で

---

<sup>6</sup> Matsumoto Y., *Noun-modifying Constructions in Japanese: A Frame-semantic Approach*, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins, 1997.

は「米子に泊まった」というコトと「朝になっている」という状況が時間的に連続しているが、(9 b) では主節と修飾節の間に同様の連続性が保証されていない（即ちお風呂に入って上がると朝になっているわけではない）ためであると説明している。

(9) a. [ 米子に泊まった ] 朝

b. \* [ 夜遅くお風呂に入った ] 朝は、肌寒く感じる。（白川 1986:9）

加藤 (2003) は白川の提案を「連続性の条件」として敷衍しており、(9b) のような表現が成立していないのは、「連続性の条件」が保証されていないからだと説明している。

最後に、日本語の名詞修飾表現を語用論と認知意味論の観点から分析した研究としてMatsumoto (1997, 1988) も挙げられる。Matsumoto (1997) はFillmoreのFrame Semantics（フレーム意味論）に基づいて日本語の名詞修飾表現を分析し、日本語の名詞修飾表現の解釈には語用論的要因が大きく関わっていると主張している。そして、「日本語の名詞修飾節は、いわゆる世界知識によって、主要部名詞と修飾節を語用論的に有意味に関連づけられる限り成立する」と指摘している（堀江・パルデシ 2009: 55）。

このような語用論的な要因によって、英語などの言語で関係節や補文として成立しにくい表現の中には、アルメニア語の定形節の名詞修飾表現としても成立しないケースが見られる。

その一方で、アルメニア語では非定形動詞による名詞修飾表現がかなり生産的である (3) (Dum-Tragut 2009)<sup>7</sup>。以下、日本語の名詞修飾表現について語用論的な観点から観察したこれらの先行研究を参照しつつ、アルメニア語の非定形動詞による名詞修飾表現の成立要件およびその制約にかかわる要因を考察する。

### 3 分析と考察

#### 3.1 日本語とアルメニア語の類似点

本節において、まず、アルメニア語の不定形動詞による名詞修飾表現の解釈に意味論的・語用論的な要因がどの程度関わっているかということを再確認するために、日本語と並行的な現象が観察されるいくつかの場合を見ておこう。

(10) [[Nomura-san ga katta] basyo] wa doko desu ka .

Mr. Nomura NOM bought place TOP where is QP

a. ‘Where is the place (in which) Mr. Nomura bought ( ) ?’

b. ‘Where is the place (which) Mr. Nomura bought?’

(Matsumoto 1997: 42; 一部改変)

c. [Paron            Nomura-i            gn-ac]            vayr-ě  
vortel            ē.

さん      野村-属格      買う-結果分詞      場所-定      どこ  
助動詞-3人称単数

「野村さんの買った場所はどこですか。」

Matsumoto (1997) が指摘しているように (10) の解釈が (a)

<sup>7</sup> Dum-Tragut J., *Armenian: Modern Eastern Armenian*, Amsterdam: John Benjamin, 2009.



になるか (b) になるかは、「野村さん」や「場所」に関して対話者が共有している世界知識によって定まる。それに対して、例えば、(11) の英語において ‘place’ という語が「場所」という解釈を許しているにも関わらず、(11) の意味解釈として「買う対象」という解釈のみが認められている。

(11) Where is [the place [Mr. Nomura bought]]? (Matsumoto 1997: 43)

そして、世界知識の関連性がより明確に分かるように (12) のように書き換えると、「お店」というのが「買う場所」なのか「買う対象」なのかははっきりしてくると Matsumoto (1997) が指摘している。この点についてアルメニア語は日本語と全く同様の現象を見せており、(10 c) では日本語と同様な二通りの解釈が可能になっており、(12 a) の アルメニア語訳では、「子供が買ったお店」という文では (12 a) 「お店」が買う場所であり、「ドナルド・トランプが買ったお店」という文では (12 b) 「お店」が買う対象であるように解釈される。

(12) a. [[Tomo-tyan ga katta] mise] wa doko.

Tomo-FAM.DIM NOM bought store TOP where

a'. [[P'ok'rik Tomo-i gn.ac] xanut'-ě] vortel̥ ē.

小さい トモ-属格 買う-結果分詞 店-定 どこ 助動詞-3

人称単数

‘Where is the store (in which) little Tomo bought ( )?’

b. [[ Donarudo Toranpu ga katta] mise] wa doko.

Donald Trump NOM bought store TOP where

b'. Donald T' ramp'-i gn-ac xanut'-ě vortet ē.

ドナルド トランプ-属格 買う-結果分詞 店-定 どこ 助  
動詞-3人称単数

‘Where is the store (which) Donald Trump bought?’

次に、加藤 (2003) の言う「連続性の条件」がアルメニア語に当てはまるかどうかを検討する。(13) (14) の (a) (b) を見てみよう。これらの例文において日本語とアルメニア語が同様に (13) が成立し、(14) が成立しないということから、この点についても日本語とアルメニア語は平行的な現象を見せているということが分かる。

(13) a. [ 徹夜をした ] 朝は、妙に目が冴えるものだ。(白川 1986:10)

b. [Amboļj gišer art'un mnac'-ac] aravot-ě ač'k'-ers tarorinakoren parz en.

一晩中 起きている 残る-結果分詞 朝-定 目-複数.1  
人称 妙に 冴える だ

「徹夜をした朝は奇妙に目が冴えるものだ。」

(14) a. \* [ 寒い冬の夜外で遊びすぎた ] 肺炎

b. \*[Jmraŋ c'urt gišer-ě drs-um šat xałac'-ac] t'ok'aborb-ě.

冬-属格 寒い 夜-定 外-所格 沢山 遊ぶ-結果分詞  
肺炎-定

「寒い冬の夜外で遊び過ぎた肺炎」

以上で考察したように、アルメニア語の非定形名詞修飾表

現は日本語の連体形述語による名詞修飾表現と数多くの類似点を見せており、両言語の名詞修飾表現に対して語用論的な要因が大きく関わっている。次節において、日本語とアルメニア語が相違点を見せる場合について見てみる。

### 3.2 日本語とアルメニア語の相違点

前節において、日本語とアルメニア語の名詞修飾表現がかなりの程度対応関係を見せていることを確認し、アルメニア語の名詞修飾表現の解釈にも日本語と同様な語用論的な要因が関わっていることを確認した。

では、日本語とアルメニア語の相違が観察されるのはどのような場合であろうか。一つは、寺村 (1992) の「外の関係」における空間を表す名詞を主要部とする名詞修飾表現の場合である。まず、(15) から (18) のような場合を見てみよう。(15) (16) はアルメニア語において成立するが、(17) (18) は成立しない。このこと、アルメニア語の「空間」を主要部とする非定形名詞修飾表現では、主節と修飾節の間に空間的な隣接性・密接性が要求されるという制約が関わっている。

(15) [Erexaner-i      xał-al-u] harewanut‘yamb

子供-属格      遊ぶ-不定詞-属格 隣.位格

「子供が遊んでいる隣」

(16) [\*Erexaner-i      xał-al-u] harewan senyak-um...

子供-属格      遊ぶ-不定詞-属格 隣      部屋-位格

「子供たちが遊んでいる隣部屋」

(17) [Xanut<sup>‘</sup>        gn-al-u ]    kes čanaparh-in...

店            行く-不定詞-属    途中-与格

「店に行く途中」

(18) [\*Xanut<sup>‘</sup> gn-al-u ]                harewan połoc<sup>‘</sup>-um...

店            行く-不定詞-属 隣                道-位格

「店に行く隣道」

次に、アルメニア語で成立しにくいのは、寺村（1992）が「短絡型」と呼ぶ、主要部名詞と修飾節の間に解釈上の懸隔（ギャップ）が存在するタイプの名詞修飾表現である。アルメニア語にも(19a'~c')の様に、修飾節と主要部名詞の間にある因果関係がはっきりしていれば「短絡型」的な名詞修飾表現が成立可能である。ところが、(19 d'~g')のように修飾節と主要部名詞の間にそのような直接的な因果関係が想定しにくい場合は、アルメニア語の名詞修飾表現は成立しにくくなる。

(19) a. [ 泣ける ] 曲

a' [lac<sup>‘</sup>-el-u]        eražštut<sup>‘</sup>yun

泣く-不定詞-属格 曲

b. [ 笑う/笑える ] 映画

b' [cicał-el-u]    film

笑う-不定詞-属格 映画

c. [ 頭痛が治る ] 薬

c' [glxac<sup>‘</sup>av-n        anc<sup>‘</sup>n-el-u ] del

頭痛-定冠詞    不定詞-属格    薬

d. [ 頭がよくなる ] パン

d' \*[xelac'ian-al-u]                      hac'

賢くなる-不定詞-属格    パン

e. [ 眠れない ] コーヒー

e' \*[č'-k'ne-el-u]                      surč

否定-寝る-不定詞-属格    コーヒー

f. [ 腹を痛めた ] 娘

f' \*[p'or-e    c'avec'r-ac    ]              dustr-ě

腹-定    痛める-結果分詞    娘-定

つまり、アルメニア語においても日本語と同様に世界知識の条件が満たされていると言っても、修飾節と主要部名詞の間の意味解釈上のギャップが大きければ、名詞修飾表現として成立しなくなる場合があるということである。例えば、(20 a) の日本語に対して (20 b) のアルメニア語が成立しないのは、アルメニアで台風が起こらないため同様の状況が想定しにくく、それゆえ成立しないと言えるとしても、(21) (22) の「吹雪で学校を休む」というような状況や、「怖い話を聞くと夜一人で外に出られない」というような状況は十分に想定しうる。だが、何れもアルメニア語では成立しない。

(20) a. [ 大学が休みになる ] 台風

b.    \*[hamalsaran-ner-ě                      aysōr                      č'ašxat-el-u    ]  
t'ayfun-ě

大学-複数-定    今日    営業しない-不定詞-属格    台風-奪格

「台風で今日営業していない大学」

(21) a. [ 学校が休みになる ] 吹雪

b. \*[dproc'-ner-ě      p'akv-el-u]      buk'-ě  
学校-複数-定 閉鎖される-不定詞-属格 吹雪-定

「学校が閉鎖されている吹雪」

(22) a. [ 夜遅く一人で外に出られない ] 怖い話。 b.

\*[Giešer-ov menak durs gn-al      č'karolan-al-u]      sarsap'  
patmut'yun

夜-具格      一人      外      行く-不定詞      出来ない-不定詞-属  
格 怖い      話

「夜一人で外に出られない怖い話」

上記の観察を敷衍すると、アルメニア語の名詞修飾表現においては、主要部名詞と修飾節の間に許容される意味解釈上の懸隔（ギャップ）の範囲が日本語よりも狭いことが分かる。具体的には、アルメニア語においては「時空間上の隣接性・密接性あるいは直接的な因果関係」が言語的に明示されていることが日本語よりも強く要請されるという相違点がある。

#### 4. おわりに

本研究では、日本語との比較を通じて、アルメニア語の名詞修飾表現の成立に語用論的制約が密接に関わっていることを確認した。一方で、アルメニア語においては、主要部名詞と修飾節の間に許容される意味解釈上の懸隔（ギャップ）が日本語よりも狭いことが確認された。具体的には、アルメニア語の非定形名詞修飾表現において、主名詞と修飾節の間に明確な因果関係および時空間的な隣接性、密接性が要求されているということが確認された。

ԼՈՒԻԶԱ ՔԼՈՅԱՆ, Բ.Գ.Թ.  
Նագոյա համալսարան,  
Ճապոներեն լեզվի և մշակույթի ֆակուլտետ  
Էլ.հասցե՝ luizakloyan39@gmail.com

**ԳՈՅԱԿԱՆԱԿԱՆ ԱՆԴԱՄԻ ԼՐԱՅՈՒՄ  
ԿԱՊԱԿՑՈՒԹՅՈՒՆՆԵՐԻ ՀԱՄԵՄԱՏԱԿԱՆ  
ԳՈՐԾԱԲԱՆԱԿԱՆ / ՊՐԱԳՄԱՏԻԿ  
ՈՒՍՈՒՄՆԱՄԻՐՈՒԹՅՈՒՆ ՃԱՊՈՆԵՐԵՆՈՒՄ ԵՎ  
ՀԱՅԵՐԵՆՈՒՄ**

**ԱՍՓՈՓՈՒՄ**

**Հիմնաբառեր՝** պրագմատիկա, ճապոներեն, հայերեն, գոյական անդամի լրացում, համեմատական քննություն, որոշիչ, արտաքին հարաբերություն, ներքին հարաբերություն

Գոյականական անդամի լրացում կապակցությունները (Noun Modification Clause Constructions) երկար ժամանակ եղել են միջլեզվական հետազոտությունների առանցքային թեմաներից: Այս ուսումնասիրությունները լեզվաբանական տիպաբանության մեջ հանգեցրել են այն մտայնության, որ եվրոպական և ասիական լեզուներն ունեն «գոյականական անդամի լրացում կապակցություններ»-ի տարբեր տեսակներ, որոնք, ըստ այդմ, բաժանվել են երկու հիմնական լեզվաբանական խմբերի (Comrie 1996, 2002): Ճապոնացի լեզվաբան Մացումոտոն (Matsumoto 1997) Արևելյան և Հարավ-Արևելյան Ասիայի շատ լեզուների համար առաջադրել է «ընդհանուր

գոյականական անդամի լրացում կառուցվածքներ» (General Noun Modification Clause Constructions) եզրույթը: «Ընդհանուր գոյականական անդամի լրացում կառուցվածքներ»-ն իրենցից ներկայացնում են միատիպ գոյականական անդամի լրացում կապակցություններ, որոնք ընդգրկում են քերականական գործառույթների լայն շրջանակ, սակայն արտաքուստ նման են որոշյի (Relative Clause) գործառույթ իրականացնող կապակցություններին և կարող են արտահայտել այլ լրացումային իմաստներ, ինչպես ցույց է տրված ճապոներեն օրինակ (1)-ում:

(1) atama ga       yoku-naru     hon  
 head NOM       good become   book

(Matsumoto 1997:7)

Անգլերենով այն կհնչի այսպես՝ ‘the book (by reading which) ( ) head gets better’

Հայերենով՝ «Գիրք, որը կարդալով ( ) գլուխը լավանում է (մարդը խելացիանում է)»:

Հայերենը, լինելով հնդեվրոպական լեզու, հազարամյակների ընթացքում սերտորեն շփվել է տարբեր լեզվաընտանիքների հետ, որի արդյունքում ձեռք է բերել հարուստ և լեզվաբանության տեսակետից չափազանց ճկուն և հետաքրքրական լեզվական կառուցվածքներ (մի կողմ թողնելով այս կամ այն լեզվական երևույթների ծագման կամ վաղեմության վերաբերյալ տարակարծությունները): Սակայն դժվար է հայերենը հստակ դասել այս կամ այն լեզվաբանական տիպին, քանզի լեզվում առկա են երևույթներ, որոնք կարելի է դասել քննարկման առարկա դարձած լեզվաբանական խմբերից յուրաքանչյուրին: Այսպես, օրինակ՝ հայերենում նախադասություններն ունեն ոչ միայն «եվրոպական» տիպի լեզուներին



բնորոշ երկրորդական (վերջավոր) դրույթներով կառուցվածքներ (Finite Clause Constructions), այլև դերբայական դարձվածքներ, որոնք լեզվաբանական տիպաբանության մեջ կոչվում են «ոչ վերջավոր դրույթներով կառուցվածքներ» (Non-finite Clause Constructions), և իրենցից ներկայացնում են «ասիական» տիպի լեզուներին բնորոշ կապակցություններ: Այս կապակցություններում կարելի է դիտարկել զարմանալի նմանություններ հայերենի և ճապոներենի միջև: Այսպես օրինակ, (2) ճապոներենի գոյականական անդամի լրացում կապակցության իմաստը կարելի է վերծանել ինչպես (2ա) կամ (2բ)՝ հաշվի առնելով խոսացողի աշխարհիմացությունը: Նույն երևույթը կարելի է դիտարկել նաև (2')-ի հայերեն նախադասության տարբերակում:

(2) [[Nomura-san ga katta] basyo] wa doko desu ka . (Japanese)

Mr. Nomura NOM bought place TOP where is QP

(Matsumoto 1997: 42; modified)

ա. «Որտե՞ղ է այն վայրը, որտեղից պարոն Նոմուրան գնել է ( )»:

բ. «Որտե՞ղ է այն վայրը, որը գնել է պարոն Նոմուրան:»  
(Մացումոտո 1997: 42; փոփոխված)

(2') [[Պարոն Նոմուրայի գնած] վայրը] որտե՞ղ է :

Այսօրինակ նմանությունները երկու լեզուների միջև բազմազան են: Մասնավորապես, անորոշ դերբայի սեռական-տրական հոլովով արահայտված դերբայական դարձվածքները թույլ են տալիս վերարտադրել ճապոներենի այնպիսի բառակապակցություններ, որոնք ավելի մեծ դժվարություն են ներկայացնում այլ եվրոպական լեզուներով թարգմանվելիս: Այնուամենայնիվ, այսօրինակ գուգահեռներ հնարավոր է անցկացնել ոչ բոլոր նախադասություններում: Ինչպես տեսնում

ենք ստորև բերված օրինակներում, որոնցում դիտարկված են «պատճառահետևանքային», «ժամանակային», «տարածական» իմաստ արտահայտող կապակցությունները, ճապոներենի ոչ բոլոր նախադասություններն են վերարտադրելի հայերենի դերբայական դարձվածքներով («\*»-ը ցույց է տալիս հայերենում տվյալ դերբայական դարձվածքի անընդունելի լինելը):

(3) երկար տարիներ [[արտասահմանում **ապրելու**]  
**արդյունքը**]...

(3') naganenn [[gaikoku-ni **su-mu** / **sun-nda**] **kekka**]...

(JP)

for\_a long time abroad-LOC live-PRS / live-PST  
result

‘the result of living/having lived abroad’

(4) \*[[մարդ **սպանելու**] **մեղք**]...

(4') hito o **koroshita tsumi**...

human ACC kill.PST sin

(5) [[խնջույքին **մասնակցելու**] **առավոտը**]...

(5') [[paatii-ni **sankasu-ru** / **sankasi-ta**] **asa**]...

party-in participate-PRS participate-PST morning

‘the morning before/after participating in the party’

(6) \*[[խանութը **բացվելու**] **ժամը 10-ը**]...

(6') [[mise ga hira-ku] 10 ji]...

shop NOM open-PRS 10 o'clock

(7) a. [[խանութ **գն-ալ-ու**] **կես ճանապարհ-ին**]

shop go-INF-GEN half way-DAT.DEF

(7') [[mise-ni **ik-u**] **totyuu-de**]...

shop-LOC go-PRS half\_way-LOC

‘on (my) way of going to the shop...’

(8) \*[[խանութ **գն-ալ-ու**] **հարևան փողոց-ում**]...

(8') [[mise-ni        **ik-u**]    **tonari no miti**]...

shop-LOC go-PRS next GEN road

‘next road on (my) way of going to the shop...’

Այսպիսով կարելի է եզրակացնել, որ հայերենի դերբա-  
յական դարձվածքների վերծանելիության մեջ պրագմատիկ  
գործոնն ավելի նեղ շրջանակ է գրավում քան ճապոներենում,  
և պահանջում է ավելի ուղիղ տարածական, ժամանակային  
կամ պատճառահետևանքային փոխհարաբերություն լրացու-  
մի և լրացյալի միջև: